

緑 ネット通信 No.81

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆
 年会費：1000 円
 口座番号：00170-9-696174
 連絡先：高橋盛男 090- 2935- 9444

都市の緑を残すには、緑を見守り育てる人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は「みどり」、特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携し、その輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

ぷらっと 子どもの森 はじめました

子どもたちが自由な発想でみどりと触れ合える機会をもっと

まつど暮らしの森会議 ぷらっと子どもの森グループ 野口 功

子どもたちに森で気楽に過ごすひとときを

松戸で「ぷらっと 子どもの森」という新しい試みが始まりました。「気軽に ぷらっと行って遊べる森」—そんなイメージで名づけられました。まだ「いつでも」とはいきませんが、1~2カ月に一日、常盤平駅北口近くの「囲いやまの森」で行われます（開催月の第2日曜日、午前10時~午後1時。雨天の場合は翌週の日曜日）。

遊具は、長大ブランコ、木登りネットくらいしかありませんが、里やまボランティアのベテランたちが、森での過ごし方や遊びをいろいろとアドバイスをしてくれます。虫探し、木や竹切り体験、森の工作や探検などなど。これからの季節、森の中でゆっくり過ごすのも快適です。

増えてきた子育て支援団体と里山活動の連携

松戸は、街中のあちこちに小さな森がありますが、十分管理しきれていないのが実情です。それを素敵な自然空間によみがえらせるのが里やまボランティア活動。その輪が広がっています。

さきがけは1995年に活動が始まった関さんの森。2004



年からは里やまボランティア入門講座の修了生による里やま活動団体が次々に生まれ、「松戸里やま応援団」として連携した活動を展開しています。

2012年には、整備した森をいっせいに市民に公開する「オープンフォレスト in 松戸」が始まり、以降は毎年春の開催で11回を数えています。身近な森で自然を体験できると好評で、春の1週間だけではなく、もっと機会を増やしてほしいという希望が、参加者から寄せられていました。

また、NPO法人「子どもまつど」の「森であそぼう」プロジェクトも、いくつかの森で毎年行われてきました。こうした積み重ねを経て、2020年11月には、子育て支援など多数の市民団体と里やまボランティア団体が連携した森の開放イベント「第1回 あそびの森」が開催されるまでに発展してきました。

「暮らしの森会議」と「ぷらっと こどもの森」

こうした活動が2021年、県が主催する「第1回 ちば里山アワード」で最優秀の里山大賞を受賞しました。

それを機に里やま応援団は、講演会「つなごうよ 森と地域と子どもたち ~自然のなかではぐくまれるもの~」を



開催し、都市の森をいっそう活かしていく道を模索してきました。さらに、他分野の市民団体や学者・研究者、行政などと一緒に都市の森のこれからについて考える場として、今年4月に「暮らしの森会議」が発足しました。

その話し合いの中で、

「年1回のオープンフォレストだけでは、そのとき限りで終わっちゃうのが惜しい。森への親しみもふだんの暮らしになかなかつなげていけないよね」「もっと森と気軽につきあってもらえる機会を増やしたいな」

という意見に多数のメンバーが賛同。そこからスタートしたのが「ぷらっと 子どもの森」です。決まったスケジュールやプログラムを用意するのはあえてやめよう。子どもたち、親子で「ぷらっと」立ち寄って、自由な発想であそべる森がいいのではないか—— イベント名もそんなイメージから付けられました。

まだ始まったばかりの「ぷらっと 子どもの森」。これからどのような姿に育っていくのかを楽しみに、森が好きな仲間たちと続けていきたいと思えます。

さようなら 秋山の森

里やま応援団の共同運営による 14 年の活動に終止符

緑のネットワーク・まつど 高橋盛男

「保全と活用の連携」では先駆的な森

「あそびの森」や「ぷらっと 子どもの森」、幼保園児の自然体験に小学生の校外活動……、緑を楽しむ子どもたちの姿が松戸の森に増えています。しかし一方、市内の緑地、特に農地と樹林地は相変わらず減る傾向にあります。

そうしたなか、およそ 14 年間にわたり続いてきた「秋山の森」の活動が、今年5月末をもって終了。関係者による「秋山の森お別れ会」が6月24日に開かれました。また、森の閉鎖にともない、秋山の森をフィールドとして利用してきた「Save The Green@Akiyama」(以下、STGA)も活動を終えることになりました。

秋山の森の活動は、里やまボランティアの存在を知った地権者が、住宅跡地に残る屋敷林の整備を望んだことがきっかけでした。その申し出に応える目的で「松戸里やま応援団(以下、応援団)」ができ、秋山の森を整備してきました。そして、子育て世代のグループが立ち上げた STGA がその活動に参画し、多彩なイベントを繰り広げながら、秋山の森に若いファミリー層を呼び込んできました。

片や保全の担い手の応援団、片や森の活用のアイデア豊富な STGA。この相互補完型の連携は、松戸の里山活動のなかでも先駆的な取り組みでした。

ぜい弱な里やま活動フィールドの担保性

なぜ、秋山の森の活動に終止符が打たれることになったのでしょうか。それは森の地権者が、惜しみながらも土地の売却を決めたからです。しかし、それは苦渋の決断でした。秋山の森の地権者は、自ら応援団を受け入れたように、里山の活動には理解を示していた方です。応援団との関係も良好でした。けれども他方で、この森は近隣の一部から寄せられる苦情が絶えない状況も長く続いていました。

そうした苦情が寄せられる度、矢面に立たされてきたの



上/関係者 30 名余りが集まったお別れ会。右/お手製のピザ窯も最後のご奉公。(写真: 小川忍)



が地権者です。以前には、林縁にあったケヤキの伐採を余儀なくされたこともあり、苦情対応で地権者にかかる経済的な負担も、相当に大きなものでした。

フィールドの喪失を残念に思いながらも「その心労のほどはよく理解できる」と、秋山の森の代表を務めてきた野口功さんと松田明光さんは言います。

確かに今回のできごとには、やむを得ないところもあると思います。ただ、気になるのはこの事例が示すように、里山活動のフィールドそのものの担保性が、現状ではきわめて低いことです。他の応援団のフィールドでも、相続などを理由に土地が売却された例があります。

毎年、里やまボランティア入門講座などにより、里山仲間は増えますが、その活動フィールドの継続性が保たれなければ、同じようなことが今後も起こり得る可能性が高いのです。「みどりの市民力」を保管する新たな制度づくり。「みどりの行政力」の発揮が急がれます。

幸谷放課後児童クラブ
初めての竹ぽっくりづくり
市立幸谷小学校

8月22日、幸谷放課後児童クラブで竹ぽっくりづくり。1年生～5年生の学童71人の指導にあたったのは、里やま応援団 森の利活用部会の呼びかけに応じた17人の応援団メンバー。竹ぽっくりをつくるのが初めての子もいれば、のこぎりを使うのが初めてという子たちも。でも、これが楽しくないわけがない。竹切りの次はドリルで穴開け。ちょいと緊張しながらも心はワクワク。皆さん、ケガもなく上手に竹ぽっくりを仕上げると、わいわいがやがや、にぎやかに遊んでいました。



2023
里やまの夏やすみ
子どもも大人も
楽しさいっぱいの夏

Let's 体験!!
三吉の森、野うさぎの森などで
里やまボランティア体験

三吉の森では8月5日、野うさぎの森では同月2日と16日、関さんの森では同月6日、今年も「レッツ体験!!」の受講者が里やまボランティア体験に訪れました。「レッツ体験!!」は、まつど市民活動サポートセンターが青少年を対象に開いているボランティア体験講座。三吉の森では中学生1名、野うさぎの森では中学生2名と高校生、大学生が各1名の参加。関さんの森では中学生4名が参加。森の観察から竹や雑木の伐採など整備活動のほか、三吉の森では竹工作や藍の葉のタタキ染めの体験も。参加証を手にした皆さんは、ご満悦の表情でした。(写真は三吉の森)



河原塚南山自治会
グリスロで来た子どもたちと森遊び
野うさぎの森

8月23日、野うさぎの森に、河原塚南山自治会の子ども16人と大人9人が、グリスロに乗ってやってきました。グリスロとは、「グリーンスローモビリティ」の略称。時速20km未満で走る電動車を使った公共交通。松戸では小金原地区と河原塚地区に導入されています。森に訪れた子どもたちは、竹切りに挑戦した後、バトミントン、ブランコ、ハンモックなどに興じ、さらに切った竹を使い、藤田さんの指導でリズム遊び。最後は藤田さん作詞作曲の「野うさぎの森の歌」を全員で大合唱。濃密な里やま体験に、自治会の方から感謝の言葉をいただきました。



親子23名が参加
森の生き物さがしにワクワク
虫と遊ぼう in 溜ノ上の森

小さな森でも、そこは生き物たちの楽園。7月28日に開かれた「虫と遊ぼう in 溜ノ上の森」は子ども12名、大人11名の参加でにぎわいました。目をこらさないと見つからないゾウムシの仲間や寄生バチの繭などを発見。ノコギリクワガタのオスとメスを捕まえた子もいれば、ニホントカゲやニホンカナヘビとの遭遇も。身近な自然に生きる命との貴重な出会いでした。



里やまボランティア入門講座 2023 今年は土曜日に開催

21 回目を数える「里やまボランティア入門講座」。例年は平日に開講されていましたが、今年度は土曜日の開講となりました。週末ならば、若い世代の参加も見込めるのではないかと期待からの試みです。日程は受講者が自由に里やまボランティアが活動する森を訪問する期間も含め 10 月 14 日から 11 月 18 日までの 5 日間。松戸の森仲間、また増やしたいですね。

- 10 月 14 日(土)「里やまって何だろう?」「森の観察」
- 10 月 21 日(土)「行政と松戸のみどり」
「里やまボランティアって?」「森の観察」
- 10 月 28 日(土)「都市の緑の役割」
「里やまで何したい?」
- 11 月 11 日(土)「森を楽しもう」
「安全講義・作業体験・工作体験」
- 11 月 18 日(土)「里やま保全活動の原点「関さんの森」」
「里やま体験を振り返る」

この秋も、親子で森を楽しもう あそびの森 囲いやま

2020 年に「あそびの森 in 囲いやま」として第 1 回が開催された「あそびの森」。今年も囲いやまの森で 4 回目を開催します。里やま活動団体のみならず、子育て支援団体をはじめ、多彩な活動グループのコラボレーションによる、いわば秋の森の文化祭。今回は、囲いやまの森の向かいにある金ケ作育苗圃を第 2 会場として「松戸みどりのフォーラム」も同日開催されます。

- 日時 11 月 19 日(土) 10 時~14 時 30 分
- 場所 囲いやまの森/金ケ作育苗圃
(最寄り駅: 新京成線常盤平駅)
- 主催 あそびの森実行委員会
- 問い合わせ・申し込み (要事前申し込み)
NPO 法人 子どもっとまつど ☎047-344-2272

~しぜんのコラム 55~

ツミの早朝の餌はコウモリ

今年の夏、自宅から歩いて行ける公園で、頻繁にツミを目撃した。8 月上旬のある日、成鳥雄が雌に餌を渡し、雌が飛んで行く先を追うと、巣を発見。雛 4 羽を確認した。以後は、夏休みの自由研究さながら、写真を撮りながら行動を記録した。

巣に雛がいる頃は、いつも特定の木(餌渡しの木)で、餌を狩った父親が母親に餌渡し。母親は、その場で雛用に調理し、巣では雛たちに均等に口移して餌を与えていた。巣立ちが近づくと、巣に餌を運び入れ、すぐに飛び去ることもあった。

巣立ち後、幼鳥は餌渡しの木で待機し、父親は幼鳥に直接餌渡し。慣れると空中で餌渡し。餌はおもにスズメだったが、この頃の観察は昼間であった。



コウモリの翼を食べるツミの幼鳥 2023.8.28 5:28 松戸市小金原

その後、日の出 10~20 分前にも毎日餌渡しがあるという情報を入手。暗いうちから観察した結果、日の出前に運んだ餌 14 の内訳は、コウモリ (13) で、ヒヨドリ (1)。ヒヨドリは前日夕方に狩ったものか。日の出直後にネズミを運んだこともあった。

巣立ちが終わると、幼鳥と親鳥は、1 羽ずつ公園から姿を消していく。最後に見たのは 9 月 4 日に、餌渡しの木にとまっていた父親。幼鳥が 1 羽、カラスに襲われて亡くなったが、それ以外はきっとどこかで元気にしていると信じている。(山田純稔)

★松戸のみどり再発見ツアーNo.63 (観察学習会)

「松戸のシンボル矢切の斜面林矢切の斜面林から里見公園へ」

矢切の斜面林を眺め、江戸川堤防沿いに栗山配水塔、坂川、柳原親水広場、フジバカマの里を訪ね、川とみどりについて考えたいと思います。

- 10 月 15 日(日) 9:30~12:30 (小雨実施) 参加費 300 円 (会員は 100 円)
- 集合 北総線矢切駅改札口 9:30 集合 持ち物 飲み物、雨具 (解散後のお弁当は自由)
- 申込み・問合せ: 090-4078-3703 (藤田 10 月 1 日から受付開始 18 時以降) ※申込制・先着 30 名
- その他 歩きやすい服装でどうぞ